

# 文学作品における河川の描写に関する研究 — 隅田川を描いた作品を対象として —

1X10D070-7

橋本 優華

Yuka Hashimoto

本研究は文学作品のテキストにおける河川の描写が有する特徴を明らかにすることを目的とする。そのため隅田川を扱った3作品を対象として、川が表現された文章から景観要素を抽出し、ネットワーク分析、景観要素と主体の心情に着目した心情連想度別分類を試みた。その結果、河川の描写には音や匂いなどの五感を示す要素が他の要素と結びつくことで、主体の景観体験を重層的にしていること、心情の連想度が高くなるにつれて五感を示す要素の影響が大きくなることを明らかにした。

**Key Words** : 風景体験、主体と環境との関係性、文学作品、ネットワーク分析、心情連想度分析

## 1. 研究背景と目的

### 1.1 研究背景

私たちは、どのようにして風景を認識しているのだろうか。ふと気づいた時に、自分の眼前に広がっていた風景が忘れられないものとなる時、そこにはどのような要素が深く関わってくるのだろうか。

私たちの暮らす世界は、土地に固有の山河を土台に人間が生活を営んできた集積の上に成立しており、中村は『都市をつくる風景』<sup>1)</sup>において、そのような世界をトポス(場所)と呼び、トポスと身体を繋ぐものとしての風景の重要性を挙げている。つまり、風景は身体的な感覚を伴って立ち現れる世界の、ある側面である。そのような風景体験は各個人特有のものであるが、個人によって発見された風景の見方は、写真や絵画、文学作品等の表現手段を通じ、他人に共有されうるものとなる。

巨大な都市が形成されていく中で、自然環境との関係、都市との関係、人との関係、時間や空間との関係等、「関係」というものが大きな主題になっており、前田が『都市空間のなかの文学』<sup>2)</sup>において言及しているように都市というものを一つのテキストとみなし、風景体験から人間と環境との関係性においてその都市を解釈していくことは、都市の持つ人間的な側面を明らかにすることに他ならないと考える。

そのためにも、現在に至るまで、文学分野のみならず景観分野においても文学作品から都市景観を読み解くために様々な手法が模索されている。テキスト中の景観要素の抽出から、対象地域の特性を記述しようとする試みも数多くなされる一方で、柳川<sup>3)</sup>の示す「我々が景観体験・空間認識をする際、空間の持つ情報により、ある感受性が刺激され、様々な現象・心象が複雑に入り交じっているものである」(p. 181)という考えを受け、文学作品における景観体験から主体の心象にまで踏み込み主体の内面と眺めとの呼応を記述することも、将来の都市像を描く上でなんらかの示唆を与えるものであると考える。単なるテキスト中の景観要素の抽出のみにとどまるのではなく、そこから主体の内面や風景体験にまで踏み

込み、都市と人々との関係を包括的に記述し、把握するための理論や方法が必要とされている。

### 1.2 研究目的

上記のような問題意識に基づいて、本研究は文学作品のテキストにおける河川の描写が有する特徴を明らかにすることを目的とする。河川の描写に対する共通性と作品ごとに見られる違いを把握するために景観要素を明らかにし、さらに、隅田川の描写と作中の主体の内面との呼応を読み取る方法論の可能性について考察する。

## 2. 研究の枠組み

### 2.1 既往研究の整理

#### (1) 風景論に関する研究

吉村<sup>4)</sup>は、これまでの風景及び風景体験に関する言説から、風景体験の捉え方を風景発見・風景解説・風景出現の3類型に分類しそれらの説明モデルを示した。吉村の研究は、景観現象をも操作対象として扱う操作論的景観論である景観把握モデルなどに対して、解釈論からのアプローチであり、より細やかに人間の意識に迫ることへの有用性を示した。

#### (2) 文学作品中の空間描写の読み取りに関する研究

文学作品中から空間描写を読み取る研究には、①文章中の景観描写から抽出される地域景観の記述をおこなう研究、②文章表現中における自己の内面と風景認識過程の相互的な関係性の記述をおこなう研究に分類できる。

①として池田<sup>5)</sup>は、文学作品中から空間描写を読み取る手法について既往研究から、言葉の抽出・文脈の解釈の二つに類型化して考え、言葉の抽出においては松下文法を用いた客観定量的読み取りを行い、方法論としての有効性を示した。また、複数の作品に共通する景観要素を見出し、都市をイメージする上で基本となる景観に共通性があることを示した。

②として尾野ら<sup>6)</sup>は生活史を読み解くことで、主体が生活風景をどのように捉えているのかという認識構造を

明確にすることを目的とし、単語レベルで記憶の中の景観要素を抽出、クロス集計、図化を行い、状態や日時に関する表現を多用することで生活風景の記憶を捉えるということを明らかにしている。

### (3) 東京の水辺空間における景観構成要素と鑑賞媒体との関係性に関する研究

伊地知<sup>7)</sup>は名所図絵や百景を分析対象として明治以降から現代までに名所として採録された東京都心部の中小河川における景観構成要素と描かれ方の二点から、景観の特質と変容の分析を行っている。主体と河川の関係性を河川の構造ではなく、あくまでも眺めという主体にフォーカスした絵図から分析しており、眺め方の多様性を可能にする要因にまで言及している。

## 2.2 本研究の位置づけ

本研究では、文学作品の分析から主人公の内面と眺めとの呼応を明らかにするものである。そのために、文章中の景観要素を抽出し、隅田川に対する見方の変化、作中主人公の心情の推移を景観要素との関連性から分析を行う。現在まで、言説を対象として都市を解説していく分析は多数行われており、本研究においても文学作品における景観要素の抽出分析では既往研究の分析手法にみられる文章の単語レベルでの分析を踏襲するが、文学作品中の主人公の心情推移と景観要素の関連性にまで言及したものは少なく、また河川景観に焦点を当てたものはないことに本研究の特徴があると言える。

## 2.3 研究方法

本研究では、文学作品の文章から、隅田川の景観描写に対する共通性、作品ごとの違いを景観要素に着目した分析から明らかにし、さらに景観描写と作中の主人公の心情推移との関連性を探る。景観描写の共通性、差異については文章中から語句の抽出を行い、景観要素に分類、その結果を用いてネットワーク分析を行う。景観描写と作中の主人公の心情との関係性については、景観要素の単純集計結果と主体の心情との推移から分析する。

## 3. 研究対象概要

### 3.1 研究対象選定

本研究では、人間生活と関わりの深い河川に着目し、川を描いた文学作品の中でも特に隅田川を舞台として描かれた作品を対象とする。対象地周域は、江戸時代から明治時代初期にかけて、隅田川の船遊びに加え、吉原や向島へ向かう舟が行き交う、東京有数の花街でもあった。さらには明暦の大火による死者を祀った回向院や浅草寺、待乳山聖天等の聖域も多数存在する。

佐藤<sup>8)</sup>は神社仏閣という聖域と花街との共存は一見矛盾するようにも見えるが、それらは非日常へと逃避できる空間という点において共通性を持ち、抑圧された民衆

のアンダーキーな気分が横溢する場所となると述べている。そのような場所であるが故に、多くの文学者がこの地を対象にした作品を多く残しており、風景と主体との関係性を捉える作品を得る事ができると考えるためである。

## 3.2 研究対象作品並びに対象地概要

本研究では、明治期以降に刊行された文学作品のうち、隅田川やそこに住まう人々の暮らしの描写があるという条件を満たしている作品を分析対象として選定した。作品の概要を表3.1に示す。

ここで、本研究では「隅田川」の定義を「岩淵水門で荒川から分離し、王子・千住・浅草・両国を通過して東京湾へと注ぐ河川のうち岩淵水門から勝鬨橋・相生橋付近までの部分」とする。

表 3.1 研究対象作品概要

刊行年	文献名	作者	作品の分野	ストーリー概要
1911年	すみだ川	永井荷風	小説	主人公長吉と幼なじみであるお糸の異なる宿命を描いた物語。共者となり花柳界に入り込んでいくお糸と、舟屋に漢字を学ばれる長吉、長吉の母お藤、叔父である龍月、四人の心機とともに隅田川の情景が多く描かれている作品
1911年	大川端	小山内薫	自伝的小説	主人公正雄が、さまざまな共者との恋に身をやつしてゆく青春小説。未読遊びを覚えた正雄が料亭の裏座敷やそぞろ歩きする中でみる大川端の情景が存分に盛り込まれている作品
1914年	大川の水	芥川龍之介	随筆	生まれ育った下町に流れる大川を愛し、大川端の情景から繰り出される過去の記憶や、心情などが綴られている作品

## 4. 景観要素に着目した分析

### 4.1 分析の概要

作品における隅田川の描写に対する共通性と作品ごとに見られる違いを把握するために文章中に登場する景観要素に着目した分析を行う。既往研究<sup>5)6)</sup>を踏襲し、景観要素を示す語句の抽出・分類を行った後、ネットワーク分析を用いて景観要素同士の共起関係を抽出する。

### 4.2 景観要素の抽出と分類

#### (1) 景観を表す語句の抽出方法

文学作品内での隅田川の景観描写に対する分析を行う上で、基礎情報の収集として文章内で景観を表す語句の抽出を行う。

本研究では、松下文法を基にして語句の抽出を行う。松下文法とは、松下大三郎によって生み出された、日本初の一般文法であり、体系的口語文法論であると言われている<sup>9)</sup>。言語の構造を文章の内容である思念と外的記号の対応という観点から捉え原辞、詞、断句の三段階によって分析する点に特徴がある。

本分析では、英語の part of speech にあたるとされる「詞」という単位を導入する。詞の区切りは、助詞を目印とし、修飾詞と被修飾詞については、それらをまとめて一つの詞として分析を行い、名詞句・述部を抽出する。抽出の例を図4.1に示す。

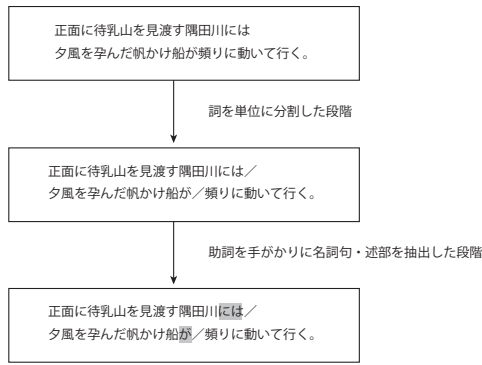


図 4.1 名詞句・述部抽出の例

図 4.1 に例示した語句抽出方法によって、分析対象作品から語句を抽出した。その際、『大川の水』については全文に対して語句抽出をおこなっている。『すみだ川』『大川端』については量が膨大であり、隅田川の記述とは無関係の場面も多くあることから、「川」「河」「水」等の言葉を含み、隅田川に対する描写のある段落に対してのみ語句抽出をおこなった。

表 4.2 に各作品の抽出語句数を示す。

表 4.2 各作品の抽出数

作品名	文合計数	当該文数	抽出要素数(個)
すみだ川	970	54	128
大川端	4829	101	206
大川の水	60	60	141

(2) 景観要素の分類項目

(1) で抽出された語句を、i) 場の雰囲気の規定するもの、ii) 場の構図を規定するもの、iii) 場の添景となるものの3つのカテゴリーに沿って分類し、各々を14種類の景観要素に分類した。表 4.3 に、各々の種別についての解説を示す。

表 4.3 景観要素の種別と概要

景観要素		
雰囲気	季節	作中において季節が読み取れる表現がある場合
	時刻	作中において時刻が読み取れる表現がある場合
	天体	要素が気象を含む天体を示す場合
	感覚	音や匂いなど主体の身体感覚をともなった体験を表す場合
構図	川自体	要素が単なる川の名称・呼称を示す場合
	川の領域	要素が川面、川周辺のながめを含んだ領域を示す場合
	まち	要素が地名や道路、まちを示す場合
	構造物	要素が住居や橋梁等の構造物を示す場合
添景	自然(遠い緑)	要素が山や、木立などの自然を指す場合
	川の要素	要素が川の水や、水の音、川のおい等を指す場合
	自然(近い緑)	要素が花や緑などを示す場合
	人工物	要素が街灯や橋の欄干などのものを示す場合
	生物	要素が川周辺に生きる生物を示す場合
	乗り物	要素が渡し船や、石炭船などの乗り物を示す場合
	人	作中において、人がながめの要素となりうる場合
その他	要素が上記にあてはまらない場合	

(3) 景観要素分類の結果

ここでは、各作品における景観要素の傾向と内容を分析する。各作品の景観要素別単純集計結果を表 4.4、各作品における景観要素の割合を図 4.5 に示す。

表 4.4 各作品の景観要素別単純集計結果

	すみだ川		大川端		大川の水	
	抽出数	割合	抽出数	割合	抽出数	割合
雰囲気	季節	3	2	2	2	
	時刻	21	9	56	10	34
	天体	8	13	5	5	
	感覚	15	32	17	17	
構図	川自体	1	8	8	8	
	川の領域	18	22	68	5	54
	まち	8	14	14	14	
	構造物	13	24	28	28	
	自然(遠い緑)	5	0	2	2	
	川の要素	4	12	20	20	
添景	自然(近い緑)	7	8	7	7	
	人工物	7	26	3	3	
	生物	2	0	1	1	
	乗り物	9	21	14	14	
	人	5	11	1	1	
	その他	2	4	4	4	

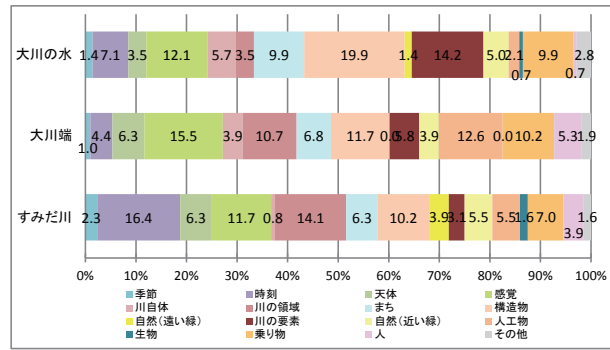


図 4.5 各作品の景観要素割合

各作品において3カテゴリーの割合を比較するとそれぞれの作品ごとに特徴が見られる。「すみだ川」では雰囲気と構図を示す景観要素、「大川端」では添景を示す景観要素、「大川の水」では構図と添景を示す景観要素が40%前後を占めることがわかった。

続いて、3項目のカテゴリー別に景観要素の割合を比較する。雰囲気というカテゴリーでは、「すみだ川」は時刻、「大川端」「大川の水」は感覚が多く抽出された。構図というカテゴリーでは、「すみだ川」は川の領域、「大川端」は川の領域、構造物、「大川の水」は構造物という景観要素が多く抽出された。添景というカテゴリーでは、「すみだ川」は乗り物という景観要素が他の景観要素に比べて比較的多く抽出されているが差はそれほどなく、どの要素も万遍なく抽出されていると考える。「大川端」は乗り物と人工物、「大川の水」は川の要素という景観要素が多く抽出されている。

4.3 ネットワーク分析

(1) ネットワーク分析の概要

作品内での隅田川の描写に対して、景観要素の出現割合だけでなく、景観要素同士の共出現を分析することで、作品毎の文章表現の特徴や時代等の背景による隅田川に対する印象の異なりを捉えることができると考える。そのために景観要素の文章内での結びつきをネットワークとして捉え、ネットワーク分析より得られる指標から、景観要素同士の共起の度合いや、隅田川の景観描写の特性を抽出できる指標を特定する。さらに、特定した指標により抽出された景観要素に関して、該当する文章を整理し、考察する。

(2) ネットワーク分析の方法と指標

ネットワークを作成するにあたり、抽出した語句のうち景観要素に分類されたものを文章内での順序に従い、時系列で並べたものを用意する。

用意した景観要素をノードとして扱い、一文の中に同時に登場する景観要素同士に対してパスを引くことで有向グラフのネットワークを作成し、ネットワーク分析に因る指標を算出する。本研究では、ネットワーク描画・分析の過程において、ネットワークを可視化・解析できるオープンソースプラットフォームである Cytoscape\*<sup>1</sup> というソフトウェアツールを利用している。

本分析では、ネットワーク分析として、各ノードについて導出される指標である「媒介中心性」「パス数」と各パスについて導出される指標である「共起の程度」に着目する。各々の指標に関する説明を行う。

まず、「媒介中心性」とはネットワーク中の特定のノードが、他のノード同士の関係をどの程度媒介しているのかということを示す指標である。媒介中心性という指標は、あるノードの前後に多様なノードのまとまりがどの程度あるかを示すことができる指標であり、本分析においては作品の場面における節目になりやすさを表す指標であると考えられる。

「パス数」という指標は、あるノードに直接接続するパスの数を示す指標であり、本研究においては、文章内で、ある一文に同時に出現した景観要素間のつながりの数がパス数としてカウントされ、今回はカテゴリーを 14 項目設定したため、パス数の最大は 13 本となる。ここで、「パス数」とは文学作品内において河川風景を記述する際の景観要素の汎用性を示す指標であると考えられる。

「共起の程度」という指標は、あるノードが、特定のノードとの関係がどれだけ強いかを示す指標である。本研究においては、文章内に出現する景観要素同士の共起の強さを示す。ここで、「共起の程度」とは、文学作品内において河川風景を記述する際に、ある景観要素同士の特異的な結びつきを示す指標であると考えられる。今回の分析では、景観要素同士の共起関係を表す尺度として Jaccard 係数を用いる。Jaccard 係数とは、集合 X と Y の共通要素数を少なくとも一方にある要素の総数で割ったものであり、 $sim = |X \cap Y| / |X \cup Y|$  と表される。

なお、ここでネットワーク指標の大小判別には、各指標の平均値より高い値を示す場合には大、平均値より低い値を示す場合には小とした。

本分析では、これら 3 つの指標より、特徴づけられる景観要素について考察していく。まず、「媒介中心性」と「パス数」の関係より、多くの場合では、「媒介中心性」が高ければ「パス数」も高くなるのが一般的な傾向ではあるが、「媒介中心性」は高く、「パス数」が小さくなる場合には図 4.6 に示すように、作品の場面における節目になりやすさを表す指標であると考えられる。

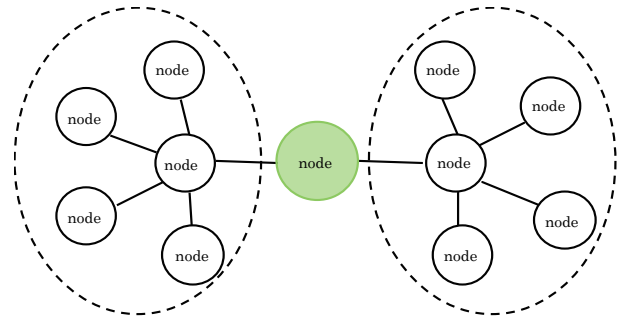


図 4.6 場面の節目となる景観要素

次に「パス数」「共起の程度」の指標より特徴付けられる景観要素の記述について、値の大小から成るマトリックスより、意味の解釈を行った。表 4-7 に示す。

表 4.7 ネットワーク指標による特徴的な景観要素の解釈

		パス数	
		大	小
共起の程度	大	多くの要素と結びつき、また要素間の共起性が強い ため、河川風景描写において特徴的な景観要素	ある特定の要素とのみ共起関係が強い、 限定的だが特徴的な景観要素
	小	多くの要素と結びつくが、要素間の共起性は 低いため、限定的な景観要素	文章内で単体で出現する事が多い景観要素

本分析では、表のマトリックスに示した景観要素同士の関係性より、二者共にパス数、共起の程度共に大である景観要素同士に着目して分析を試みる。

(2) ネットワーク分析の結果

①景観要素の「媒介中心性」「パス数」に着目した結果

各ネットワーク図並びに、「媒介中心性」「パス数」のネットワーク分析結果を概観すると、3 作品共通して「媒介中心性」「パス数」ともに大となる景観要素は「感覚」である。つまり、この要素が隅田川を描写する中で出てきやすく、多くの景観要素と結びつきやすい要素であることを示しているといえる。この結果より、隅田川を眺めた際の表現として、川のおいや周辺の音、光の反射に意識を傾けているということがわかる文章とすることで主体の景観体験をより重層的なものとしていることが考えられる。つまり、視覚からの情報だけではなく聴覚や嗅覚を伴った情報が、人が景観を認識する時の重要なポイントであると考えられる。

また、「すみだ川」において、「媒介中心性」は大であるが「パス数」は小であり、文章内の場面転換を表す景観要素として「人」が見受けられた。この結果より、特徴的な場面に表れた景観要素の特性として、①感覚が先行して眺めが捉えられた場面②人の活動が眺めとして捉えられた場面に分類することができた。さらに、「人」を示す景観要素が文章内に登場する際に、構図のカテゴリーに属する景観要素は共出現していないが、そのすぐ後の文章で構図カテゴリーに属する景観要素が出現していることがわかった。ここで、「すみだ川」の特徴として、添景に注意を向けた眺め方を指し示す文章から、場全体の構図を捉える眺め方を指し示す文章へと変化させることで場面転換を図っているのではないかと仮定する。

②景観要素の「共起の程度」に着目した結果

ネットワーク分析の結果より、景観要素同士の「共起の程度」「パス数」が大となる景観要素、二者間の「共起の程度」は大であるが、どちらか一方の「パス数」のみ大である景観要素を抽出する。表 4-9 より、3 作品に共通して「感覚」と「構造物」、「感覚」と「天体」、「川の領域」と「乗り物」の関係が隅田川を描写する際に特徴的な風景描写として抽出された。

「感覚」と「構造物」が共出現する 16 文のうち、「感覚」要素として光 (9)、音 (5)、風 (2)、におい (1)、その他 (1)、「構造物」要素として橋 (10)、家 (4)、土蔵 (2)、艇庫 (2)、堤 (1)、更衣所 (1) が抽出された。() 内の数字は回数を表す。表 3-18 より、風の描写がなされている場合には、橋の上に主体の視点があり、光の描写がなされている場合には橋や家とは離れた場所に主体の視点があることがわかる。

「天体」と「感覚」が共出現する 9 文のうち、「天体」要素として日 (2)、空 (2)、空気 (2)、月 (1)、靄 (1)、水蒸気 (1)、「感覚」要素として光 (6)、音 (3) が抽出された。日や月の光が感覚として捉えられているという当然の結果が現れた。

「川の領域」と「乗り物」が共出現する 15 文のうち、「乗り物」要素として、船 (13)、車 (2) が抽出された。1898 年に日本に初めて自動車が輸入され、1907 年に日本初の国産車ができた経緯から照らしあわせて考えてみても、3 作品が描かれた 1910 年代では渡し船や荷船、渡し船が川のある地域で暮らす人々の生活手段であり、川と船とは切り離して考える事のできない要素であったことから、作品中においても共起の程度が高いと考えられる。

図 4-8. 対象作品のネットワーク図

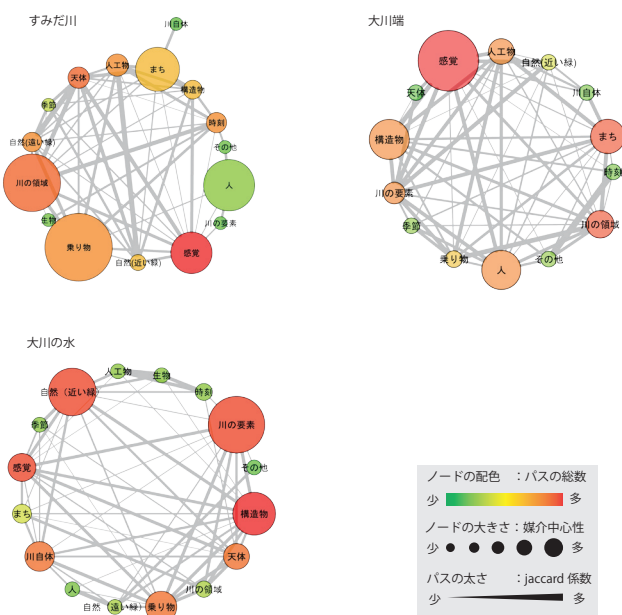


表 4-9. 「媒介中心性」と「パス数」に着目して抽出された要素

すみだ川			大川端			大川の水		
source	target	jaccard係数	source	target	jaccard係数	source	target	jaccard係数
天体	自然(近い緑)	0.3077	時刻	その他	0.3333	人工物	生物	1.0000
自然(近い緑)	人工物	0.3000	感覚	構造物	0.2195	自然(近い緑)	人	0.5000
天体	川の領域	0.2500	川の領域	乗り物	0.2188	時刻	生物	0.3333
時刻	川の領域	0.2381	感覚	川の要素	0.1818	時刻	人工物	0.3333
天体	感覚	0.2222	自然(近い緑)	川の要素	0.1765	川自体	乗り物	0.3125
構造物	まち	0.2143	人工物	人	0.1667	構造物	川の要素	0.2963
天体	自然(近い緑)	0.2000	まち	川の領域	0.1667	天体	乗り物	0.2941
天体	まち	0.1875	感覚	人	0.1613	季節	自然(近い緑)	0.2857
川の領域	乗り物	0.1818	まち	川の要素	0.1600	構造物	乗り物	0.2857
自然(近い緑)	乗り物	0.1818	構造物	川の要素	0.1563	川の領域	乗り物	0.2667
感覚	構造物	0.1765	感覚	人工物	0.1538	天体	感覚	0.2632
感覚	川の領域	0.1667	川の要素	人	0.1500	川の要素	乗り物	0.2593
人工物	まち	0.1667	人工物	乗り物	0.1471	天体	川の領域	0.2500
季節	天体	0.1538	人工物	川の要素	0.1429	自然(近い緑)	構造物	0.2500
時刻	人工物	0.1538	まち	川自体	0.1429	季節	川の要素	0.2414
人工物	乗り物	0.1538	川の要素	乗り物	0.1379	感覚	自然(近い緑)	0.2353
季節	人	0.1429	感覚	自然(近い緑)	0.1379	感覚	乗り物	0.2174
人	その他	0.1429	構造物	人工物	0.1316	感覚	構造物	0.2083
時刻	乗り物	0.1429	天体	川の要素	0.1176	まち	川の領域	0.1818
感覚	自然(近い緑)	0.1429	川の領域	人	0.1154			
自然(近い緑)	構造物	0.1429	人工物	人	0.1154			
まち	川自体	0.1429	天体	感覚	0.1034			
構造物	人工物	0.1333	構造物	川の領域	0.1026			

凡例：文字の配色 セルの配色

雰囲気 ■ パス数大 ■

構図 ■

添景 ■

5. 心情連想度に着目した分析

5.1 分析の概要

5 章では、作品における隅田川の描写と、心情との関係性を考察するために、文章中に登場する景観要素と心情連想度に着目した分析を行う。直接的な隅田川の景観に対する描写のみではなく、そこから連想された過去の経験や心情も文章に表れると考え、心情連想度という指標を設定した。これによって、各文章が隅田川の景観描写とそこから連想される心情の関係性について分類を行い、連想度を付加した。また 4 章で得られた各文から抽出された景観要素の個数データを用いて、各心情連想度における景観要素の集計結果を比較し、分析を行う。

5.2 心情連想度と景観要素の関係

(1) 心情連想度による分析の方法

分析対象作品内の文章を、1 文を区切りに分割し、上記に示した心情連想度という指標を用いて、文章が主人公の行為など風景とは関係無いものを示している場合には 0、文章が隅田川の風景描写を示している場合には 1、文章が隅田川の風景に対する心情を示している場合には 2、文章が過去の記憶や体験など風景から想起された全く別の描写がなされている場合には 3 というように 4 つに分類した。

表 5-1. 心情連想度の解説

心情連想度	
0	文章が、主人公の行為など風景とは関係無いものを描写している場合
1	文章が、風景の描写のみにとどまっている場合
2	文章が、風景の描写に加え、その風景に対する心情を表す場合
3	文章が、過去の記憶や体験など、風景から想起された描写が行われている場合

(2) 心情連想度による分類結果

各作品の文章に対して、1 文ごとに心情連想度の分類を行った結果を図 5.2 に示す。

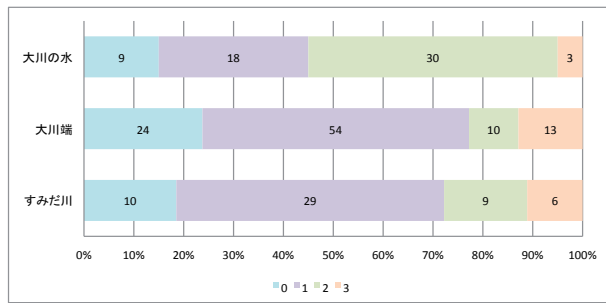


図 5.2 各作品の心情連想度分類結果

(3) 心情連想度別景観要素の集計結果

心情連想度と景観要素の関係を分析するために、4章で抽出・分類した景観要素の個数を1文ごとに示したデータを用いて心情連想度別に景観要素の集計結果を比較し、分析を行う。

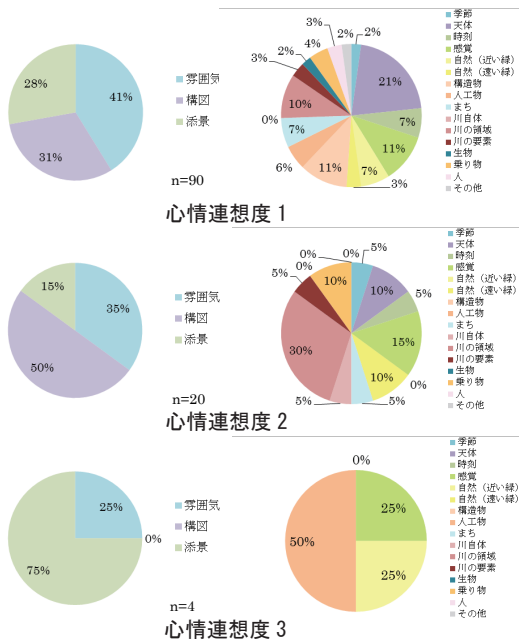


図 5.3 「すみだ川」心情連想度別景観要素集計結果

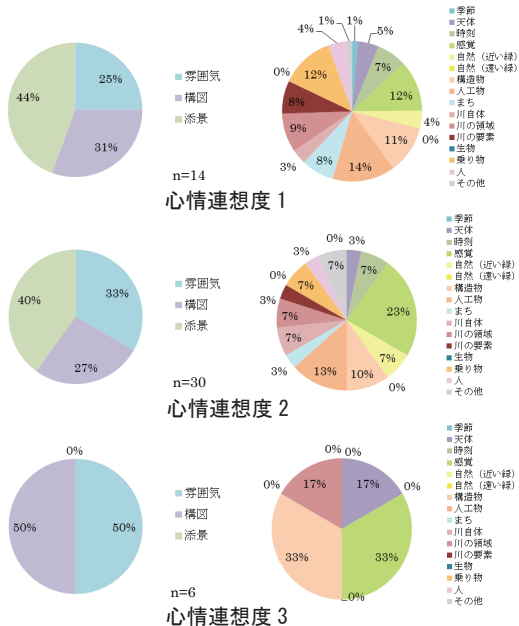


図 5.4 「大川端」心情連想度別景観要素集計結果

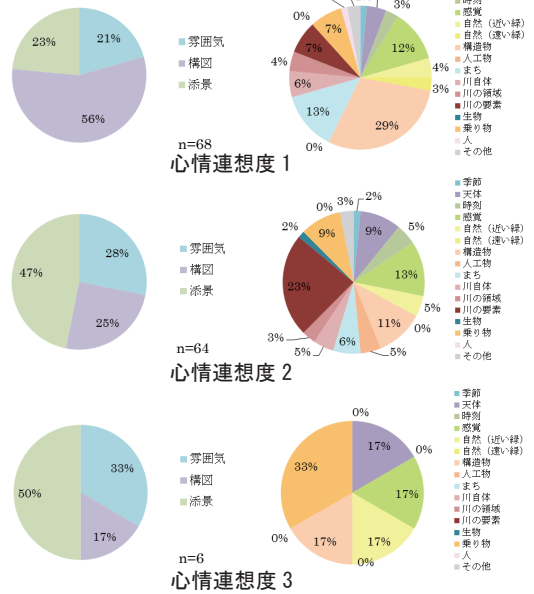


図 5.5 「大川端」心情連想度別景観要素集計結果

以上の結果より、心情の連想度が高くなるに連れて五感を示す要素の影響が大きくなることが明らかになった。そこで、文章から抽出された景観要素をカテゴリ化する際に、i) 季節や天候、時刻など場のうつろいを表すもの、ii) 地名や建造物、隅田川などの場の構図を規定するもの、iii) 渡し船や人といった場の添景となるもの、iv) 音、匂い、光などの身体感覚で捉えられる事象の4つに分類することが可能であると考えられる。

6. 結論

本研究では、文学作品のテキストにおける河川の描写が有する特徴を、隅田川を扱った3作品を対象として、川が表現された文章から景観要素を抽出し、ネットワーク分析、景観要素と主体の心情に着目した心情連想度別分類を試みた。その結果、河川の描写には音や匂いなどの五感を示す要素が他の要素と結びつくことで、主体の景観体験を重層的にしていること、心情の連想度が高くなるにつれて五感を示す要素の影響が大きくなることを明らかにした。

<参考文献>

- 1) 中村良夫：『都市をつくる風景』 藤原書店 2010
- 2) 前田愛：『都市空間のなかの文学』 筑摩書房 1989.07.31
- 3) 柳川正宏、仲間浩一：複合表象としての都市景観に関する研究 - 江戸名所図会を対象として -、日本都市計画学会学術研究論文集, No. 31, pp.181-186, 1996
- 4) 吉村晶子：風景 / 景観に関する言説にみる景観概念、風景体験類型及び説明モデルに関する研究、土木学会景観・デザイン研究講演集, no. 3, 2007
- 5) 池田朋子、大貝彰：「高山の地方文学賞受賞作品に書かれた都市景観に関する研究 - 文レベルの分析を通じて -」日本都市計画学会都市計画論文集, no. 29, pp601-606 1994
- 6) 尾野薫、星野裕司、増山晃太：生活史から読み解く生活風景に関する一考察、景観・デザイン研究講演集, no. 6, 2007
- 7) 伊地知大輔：「東京都心部の中小河川における名所の変遷と特質に関する研究」 景観・デザイン研究論文集, 2007
- 8) 佐藤善雄：『文学の風景 都市の風景 近代日本文学と東京』 蒼丘書林 2010
- 9) 徳田政信：『図説松下文法ハンドブック - 一般理論文法の先駆 -』 勉誠出版 2006